年報社会学論集32号（2019）12–22頁

社会課題とエスノメソドロジー研究との関わり
――救急医療におけるワークの研究を中心に――

How may Ethnomethodological Studies be Related to Social Issues:
Cases of Studies of Work in Emergency Medical Settings

池谷のぞみ
IKEYA Nozomi

"Ethnomethodological studies of work" may be located as one branch within ethnomethodology and conversation analysis. It is a research program Harold Garfinkel, the founder of ethnomethodology had been concerned with during his later years. Studies of work have investigated how work is conducted in workplaces to feed information about the actual organization of work practices into design of work, technologies, and social policies. Thus, studies of work have been conducted in various interdisciplinary contexts. This paper looks into hybridity, i.e., the ambition to merge ethnomethodological studies with the investigative topics treated within the settings being studied, which Garfinkel introduced as a set of criteria studies of work should satisfy, to reflect on how Garfinkel intended this policy to be implemented. Two studies in emergency medical settings are examined in light of hybridity, and also in light of how studies prompted people to think reflectively about social issues.

1．はじめに

本稿は、テーマ部会「医療現場で働くということ：社会学になにができるか」での報告を基にしている。テーマにさらに寄せて、当日の発表より少し広くして、エスノメソドロジー・会話分析が社会課題とどのように関わりうるのかを検討してみることにする。

エスノメソドロジー・会話分析は、社会生活のさまざまな領域について特徴的な形での記述を提示するプログラムの総称である。そしてエスノメソドロジー・会話分析の領域は一枚岩ではない。会話分析、メンバーシップカテゴリー分析、概念分析、ワークの研究と、少しずつ分析の切り口が異なるものが存在している。今回は、「ワークのエスノメソドロジー研究」、通常「ワークの研究」と呼ばれるものに焦点を当ててみることにする。例えば科学の実践を研究してきているM.リンチは、この「ワークの研究」の一環として自らの研究を明確に位置づけて行なってきている［Lynch 1993］。さまざまな領域の職場における仕事を記述するワークプレイス研究は、近年CSCW（Computer Supported Cooperative Work）などの学際領域を中心に展開されてきたが、その中核を占めてきたのがエスノメソドロジー研究者らによる「ワークの研究」である。そのことは、いくつかの著作に見て取れる［Randall et al. 2007; Button and Sharrock 2009; Rouncefield and Tolmie 2011; Crabtree and Rouncefiled 2012; 水川ら2017］。しかし、この「ワーク」という概念は、いわゆる職場に限定される活動を意味するわけではない。そのことは、ガーフィンケルが編集した論文集［Garfinkel 1986］ならびにワークプレイス研究をしてきた研究者たちがカンフー、ジャズ演奏、バードウオッチングなど趣味や娯楽の世界におけるワークを取り上げていることを見てもわかる［Sudnow 1978; Tolmie and Rouncefield 2013］。

こうしたワークの研究は、日本ではあまり取り上げられることが少なく馴染みが薄いプ

ログラムかもしれない[1]。エスノメソドロジーの創始者H.ガーフィンケルが晩年までこだわり続けたものである。それは例えば、1986年に出版された論文集『ワークのエスノメソドロジー研究』[Garfinkel 1986] と、晩年にあたる2002年に出された著書『エスノメソドロジーのプログラム』[Garfinkel 2002] にも見ることができる。

エスノメソドロジー研究では、社会的な現象や秩序は、人々の方法の実践によって達成されているとし、その達成する活動を「ワーク（work)」と呼ぶ。その際に用いられる方法を分析対象とするのがエスノメソドロジー研究である。この点においては、ワークの研究はエスノメソドロジー研究と同義である。上に挙げたガーフィンケルによる論文集と著作を眺めてわかるのは、人々がそのワークを行うのに、固有の知識やスキルの習熟を要するという意味で「専門的な領域」におけるワークを区別したことである。そうしたワークを対象にした研究をガーフィンケルは特に「ワークの研究」と呼んだ。対象には職業的なものも趣味的なものも両方含まれていた。晩年はこの狭義の「ワークの研究」について検討をし続けたことである。その一環でハイブリッド性の方針を明確化することで、ワークの研究のなされるべき方向性を示した。

本稿では、専門的知識が関わる場面を理解し記述することを試みるプログラムとして、ワークの研究がどのような特徴を持つものなのかを検討する。その際には、晩年に出版された『エスノメソドロジーのプログラム』においてガーフィンケルがワークの研究の基準として提示したハイブリッド性の議論を中心に取り上げる。ハイブリッド性は、端的にいえば、エスノメソドロジー研究を専門領域の人々の問題と融合させることをめざすものである。これをガーフィンケルがいかに実現しようとしていたのかを検討する。

その際には、人々が実践における課題をあらためて考え、その解決方法を検討するのをワークの研究結果が促すとすればそれはいかにしてなのか、著者が過去に行なった救急医療のワークの研究を提示しながら示していく。これを通して、専門領域における活動を「ワークの研究」のプログラムに従って分析し記述することが、結果的に市民生活に関わる社会的課題にいかに関わりうるのかについても示す。それにより、エスノメソドロジー研究に対してしばしば持たれる、「扱っていることが狭すぎて何をしているかわからないという印象」[岸ら2018] の解消に少しでも貢献することをめざす。

2. ワークの研究というプログラム

(1) ワークの組織化を記述する

労働、産業、職業、仕事（をすること)、働くことに関して、これまで労働社会学、職業社会学、産業社会学などにおいて多くの研究がなされてきた。ガーフィンケルは、そのなかでほとんど関心が払われてきていないのが、どのようにして仕事（ワーク）が実際に組織されることで、私たちが「現象」として理解できるようになっているのかという点であると指摘した [Garfinkel 1986]。その上で、「ワークの研究」と呼ばれる研究プログラムを提示した。ワークの研究とは、一言でいえば、ある領域で達成されると理解されているワークがいかに達成されるのかを記述することである。しかしそれは単純に手順を記述することとは異なる。ワークがいかに組織されるのかを記述するのである。ワークの組織化に注目する理由は、特定の方法で組織することで、ワークの従事者は互いの行為を理解し、活動を遂行するからである。

しかしワークの組織化を記述することに唯一無二の方法は存在しない。記述対象は、ほ

とんど言葉が交わされることなく、カンフーのように極めて身体的な活動かもしれないし、図書館における図書の分類のように語りを通して活動が行なわれることがほとんどなく、結果として分析対象の多くは図書館内の文書や職能団体の資料、コンピュータ上に入力されたりしたものが対象になるかもしれない［Ikeya and Sharrock 2018］。その活動に適切に固有な形で記述する方法を模索するしかない。したがって例えば会話分析は手法として万能薬とはならないのである(2)。

模索すべき、その活動に適切に固有な方法で行なった記述とは、その活動に従事する人々にとって理解可能であり、そしてまた彼らが「適切である」と見なすものでなければならない。当然のことながら、そこには彼らの「合理性」が記述されねばならない。しかしながら、この「合理性」はその領域において当たり前とみなされている「合理性」であり、特定場面において間主観的に成立する「合理性」である。つまりA.シュッツが提示した意味での「合理性」にあたる［Garfinkel 1967; 浜1999］。この点が、シンボリック相互作用論を含む、ウェーバー理解社会学の系譜にある質的社会学［岸ら2016］と呼ばれるアプローチとの違いである。

次に問題となるのは、行為の組織化を通じて、適切な形で互いに活動を遂行できるという、その活動に固有の能力である。これをガーフィンケルは「メンバー」という概念を導入してエスノメソドロジーの記述対象とした。

2)「メンバー」の概念

ガーフィンケルは、「メンバー」の概念で一人の人を指すのではなく、自然言語の習熟を意味するのだとした［Garfinkel 1967: p. 57, n. 8; Garfinkel and Sacks 1970］。「自然言語の習熟」が日常会話を可能にするような最も基本的な能力に限定されないことは、カンフーから科学実験までをワークの研究としてガーフィンケルが位置づけていたことからも明らかである。「いまここ」において、集団のメンバーとして活動を遂行できるという「類型（タイプ）としての能力」であり、またその能力を備える「類型（タイプ）としての人」を意味するものとして使っているという点である。ここで問題となるのが、「類型（タイプ）としての能力」である。これは個別の実際の事例とどのような関係にあるのだろうか。その点を考えるために、次にローカル性の二つのレベルについて次に触れる。

3）組織化の記述における二つのローカル性

ワークの組織化を記述しようとするとき、エスノメソドロジー研究者は可能な限り、初めは個別の特定状況における実践がなされる場に居合わせることをする。つまりフィールドワークである。後にビデオや録音データによって理解しようとする。その際に問題となるのが、ワークの遂行において大前提とされていることである。専門的な領域では、その領域に深く関わる人でなければわからないことが前提とされて活動は遂行される。ここで便宜的に、メンバーにとって活動の遂行の中で大前提とされるようなことを「類型（タイプ）としての能力」と呼ぶことにする。この「類型（タイプ）としての能力」が、個々の実践の実例において（つまり個別の特定状況において）大前提とされるということは、実際に活動がなされる状況においては、参与者の間で言語による確認がなされることもほとんどないことを意味する。しかしワークの遂行において織り込まれる形で組織化されている。したがってそのワークの組織化の記述、つまりは実践の方法の記述においては欠かせないのが、この大前

提とされている「類型(タイプ)としての能力」である。メンバーにとって大前提とされることは、行為において言語化されることがほとんどないからこそ、外部からの研究者にとって記述することが難しい。しかし実は、活動において大前提とされることが、個別の状況に共通の、個別事例を超えて前提とされるような能力なのである。これが先ほど便宜的に「類型(タイプ)としての能力」と呼んだものに相当する。

この「類型(タイプ)としての能力」は結果として、個別の特定状況を超えて活動の遂行の中でレリバントなものとして位置づけられ、記述の一部として提示されることになる。記述対象となっている活動の、個別の特定状況を超えたレベルで「ローカルな」能力ということになる。言い換えれば、活動の「類型(タイプ)としての場面」のレベルでローカルな能力という位置づけになる。「類型としての場面」とは、例えば「医師による診察場面」であり、個別の特定状況が「6月5日のD医師による患者Aの診察場面」となる。

ワークの研究の記述においてもう一つのローカル性のレベルがある。これが個別の特定状況のレベルである。個別の特定状況において、その状況における活動がいかに組織されるのか、つまり「いまここ」において時事刻々と生じる様々なことが、どのように適切な方法で対処され、活動が遂行されるのかというレベルのローカル性である。しかしここで留意すべきことは、その個別の特定状況の記述は、「類型(タイプ)としての場面」の「具体的事例」として記述されるという点である。つまり、特定状況の活動の組織化の記述は、その特定状況のみが参照されるのではなく、同時に、その活動に固有の「類型(タイプ)としての能力」が参照される形で記述されることになるのである。こうした記述は、活動がメンバーにとって安定的に産出されることの一端を記述することでもあり、またある特定状況をある現象の一例として人々が見なすことができることを記述することでもある。

以下では、記述が満たすべき基準としてガーフィンケルが掲げたハイブリッド性の方針に触れる。

(2) ハイブリッド性

ガーフィンケルは、専門領域のワークのエスノメソドロジー研究を「ハイブリッド研究」とし、特に晩年になってワークの研究が持つべき属性を提示した［Garfinkel 2002］。この点は、これまでほとんど論じられていないが(3)、ガーフィンケルが晩年まで考え続けていた事実を見ると、ワークの研究としてどのような研究プログラムを描いていたのかを理解するには、決して無視できない内容である。その内容は、ガーフィンケルがエスノメソドロジー研究を、メンバーの問題や検討している課題と融合させることをめざした方針として捉えることができる。それをどのように実現しようとしていたのかを見ていくことにする。

ハイブリッド性は、部分的には、メンバーの概念やローカル性のレベルとの関連ですでに述べたことと重複するが、あらためてハイブリッド性の方針の内容を確認する。記述が備えるべき属性としてのハイブリッド性の議論は大きく三つに分類できる。それは、記述の主題と内容、記述の性質、記述の提示である。

1) 記述の主題と内容

ワークの研究では、記述の主題はメンバーの志向性と合致するものでなければならない。そして記述の具体的内容はメンバーの方法である。これは同時に、研究が提示する記述内容がメンバーにとって関連性(レリバンス)を有することをも要件とすることを意味する。ここでの

「メンバー」は、上で述べた「類型(タイプ)としての能力とそれを備える類型(タイプ)としての人」である。メンバーの方法とはこの場合どういうものなのか。それはメンバーが遂行する活動の組織化の方法である。その場面でなすべきこととされていることを達成するための方法である。つまり、「達成しようとしている問題」と「その解決方法」のペアである［Sharrock and Anderson 1986］。ワークの研究においては、まずルーティン化された方法のペア、つまり問題と解決方法のペアの記述をめざす。

2）記述の性質

ガーフィンケルは、記述は特定状況を記述するものであると同時に、特定状況を超えた一般性を備えるべきであるとする。先に、ワークの研究においてはルーティン化された方法のペア、すなわち問題と解決方法のペアの記述をめざすとした。つまりワークの研究では、ルーティン化された方法を示すだけに留まらず、いかにして特定状況において実行されるのかを示す必要があるのである。これはつまり、特定状況を超えた一般性を備えると同時に、特定状況でも適切に作動することを示す記述を提示しなければならないという要件を研究者に課すことを意味する。

この記述は現象とどのような関係にあるのだろうか。出発点として、ガーフィンケルは研究者が対象と同一世界にあるという前提から始める。これはシュッツが、研究者も研究対象となる人々も社会の一員であり、日常的生活世界を起点としていることに由来する［Garfinkel 1952; 浜 1999］。日常的生活世界を研究の起点とする研究者にとっての問題は、現象はいかに成立しているのか、その組織のされ方を記述することになる。つまり研究者は、外部世界から現象をいかに理解できるのかという認識論的問題から解放され、「組織的問題」［Sharrock and Button 1991］に直面することになるのである。

現象を組織的問題として捉えることに対して、ワークの研究は一つの解を提示する。つまり、ルーティン化された方法を示すだけに留まらず、同時に個別の特定状況においていかにしてその方法が実行されるのかを示すことを通じて、「類型(タイプ)としての現象」の記述をすることになる。そして、個別の事象がいかにある特定の「類型(タイプ)としての現象」として組織化されることで、その事象を特定の「類型(タイプ)としての現象」の一事例として理解可能なのかを示すことでもある。

3）記述の提示

研究者が研究結果を提示した時に、読者や聴衆はそれを何らかのインストラクションとして受け取るものであることをガーフィンケルは指摘する。研究の提示先は学会に所属するメンバーに限られない。ワークの研究では、研究対象のメンバーに対して研究結果を提示することを研究の前提として考慮することが求められる。例えば、結果を研究対象とした組織に所属する人々に提示するとき、彼らは自分たちの組織における仕事のやり方などを改善する何らかの手がかりを得られるものとして、すなわちインストラクションを受け取ることを期待することをガーフィンケルは指摘する。

言い換えれば、ワークの研究では、研究結果の提示を研究対象となったメンバーとの関係において成立する活動の一環として捉えることを、研究者自らが課すことを求められることを意味する。これは、自らの研究結果が社会的に役に立つか否かを、研究者が一方的に決められないことを意味する。最終的には、研究結果を提示されたメンバーがどう受け

止めるのかにかかっているということなのである。ガーフィンケルは「メンバー」を一義的には、その活動について解決できていない課題を検討し、必要に応じて新たな方法を考えたりする立場の人々を「メンバー」として想定していると思われる。したがって、研究の直接対象となった活動の参与者や、その活動を管理する人も想定される。しかし、その範囲はあらかじめ決められる性質のものではない。

以下で、ワークの研究というプログラムを踏まえて活動の組織化を記述し、その研究結果を提示した時に、帰結としてどのようなことが生じうるのかを事例を通して検討する。事例としては、著者が過去に直接関わった、医療の文脈における研究を取り上げることにする。一つは、119番救急要請の受付と指令の分析で、もう一つは高度救命救急センターのカンファレンスにおけるケース報告の分析である。

3. 医療現場における「ワークの研究」の事例検討

(1) 119番救急要請の受付と指令の分析

著者は東京消防庁の要請を受け、1999年から2000年にかけて119番救急要請の調査と分析を行った。こうした調査を実施することになった背景には、市民からの救急要請が急増していたことがある。高齢化が進んでいく中で、さらに増加することが予想されていた。そこで東京消防庁は救急業務懇話会において、119番を受ける際に、担当者が重症度を区別することにより効率的な救急活動を確保するための方策を検討することにしたのである。つまり消防庁は、効率的な救急活動を確保するという課題に対処するために、要請の際の重症度を区別するという解決策を仮に想定したことになる。著者は、119番救急要請の受付段階で重症度を区別することが可能かを調査する依頼を受けた。それに対して、まずは119番救急要請の受付指令員はいかにして要請を受け付け、さらに該当消防署に救急隊出動の指令を出すのか、その実践を捉えることにした。

50事例の要請受付から消防署への指令までの音声データをトランスクリプト化したものを分析することで見えてきたのは、119番要請を受け付ける際に、異なる二つの方法が実践されていることであった。その二つの方法は、後にそれぞれ「即断型」「聴取型」と名付けられた。分析に着手した段階では、組織として統一された方法で受付から指令までなされていると想定したため、このことは著者には意外な結果であった。

「即断型」は、119番をかけてきた市民から、患者の症状に関して救急隊の出動に足る最低限の情報を得た段階で出動を決め、その時点からは救急隊が向かうために必要な住所など、患者のいる場所の確定をするための情報を聞き取っていく方法である。この方法がとられる場合には、たとえ要請してきた市民が症状について続けて伝えようとする様子があっても、受付指令員はそれを遮る形で場所に関する情報を得ることに集中する。他方の「聴取型」は、119番にかけて救急要請をしてきた市民から、患者の症状に関して必要に応じてそのまま聴き続けるか、もしくは逆に質問して聴取する方法である。受付指令員が消防署へ出動指令をする際に、付加情報として患者の症状に関して聴取した情報を伝えることや、救急要請をしてきた人に応急処置的な指示をしていることも見受けられた。通話データの分析によって明らかになったのは、上記よりやや曖昧な形で、しかしながら異なる二つのアプローチの仕方が存在することであった。

この時点では、二つの方法がどのようなものとして一つの組織に存在し、位置づけられているのかが分析者にとって定かではなかった。そこで、それぞれの方法をとる救急要請

受付指令員に対してインタビューを実施することになった。そこで明らかになったのは、「即断型」の方法を取っているのは入職時点から受付業務の訓練を受け、そのまま同じ業務に従事している、その業務については「ベテラン」と呼ばれる人たちであった。他方、「聴取型」の方法を取っているのは救急救命士の資格を持ち、救急隊としての業務を最低でも3年経験した人たちであった。しかし受付業務に配属されてから6ヶ月程度であった。そういう意味では、受付業務に関していえば、先ほどの「ベテラン」からは「新人」と呼ばれる人たちであった。実際のところ、「ベテラン」は「新人」がしばしば出動指令を出すまでに時間がかかっていることについて批判的に見ていることがインタビューによってわかった。

それでは、それぞれの方法がとられているのはなぜか、それぞれにどのような「合理性」があるとみなされているのかを複数のインタビューならびに通話データの分析から、さらに明らかにすることをめざした。その結果、「即断型」においては、最短で救急隊出動を実現することが最重要であるとし、市民からは症状について最低限必要な情報が得られれば充分であるという合理性であった。他方「聴取型」においては、患者の症状について情報を得て、それを出動指令の際に付加情報として伝えることで、救急隊が現地に到着したときに必要な体勢を車内にいる時からで取れるようにすると共に、搬送先の病院の選定も現地に向かうまでの間にある程度までできるようにするところに合理性があるとされていることがわかった。このように、それぞれの方法はそれが採用される実践において「合理性」があるとみなされていた。しかしその当時、当該組織において「正統な」方法とみなされていたのは、これまで続いてきた「ベテラン」の「即断型」であった。それはつまり「ベテラン」にとっては、二つの方法が存在するということではなく、あくまでも「聴取型」をとる人たちがまだ「新人」で仕事に慣れていないという位置づけがなされていることも明らかになった。

著者が消防庁救急業務懇話会に提出した報告書では、二つの方法とそれがいかにして実行されるのかの詳細な記述を、実際の通話データを示しながら提示した。その上で、二つの方法は、救急要請へ対応する際の効率性を最短の出動によって実現することに重きを置くのか、患者の症状に関する情報を基に救急隊が現地到着前に体勢を取れるようにすることに重きを置くのかという点で異なることを指摘した。しかし、そもそも調査が依頼されたのは、救急要請受付の段階で重症度を区別することができるかという問いに答えることあった。そこで最終的には、患者の症状についてより情報を得ようとする「聴取型」の方が重症度の判断の材料を得ることにもつながり、重症度を区別することに将来的にはつながるであろうと結論づけた。

救急業務懇話会が著者による報告書をもとに最終的に作成した答申書には、「聴取型」の重要性が確認され、受付指令員に救急技術資格者が活用されることの重要性などが今後の課題として位置づけられた［東京消防庁2000］。その後、救急技術資格者が119番を受け付けるようになったと聞いている。

この調査に加えて別の調査を実施した後に執筆した論文では、初めに、患者の移動（mobility）という問題を安定的にその都度迅速に解決するための解としてメンバーによって組織された構成物として救急医療サービスのシステムを記述した［Ikeya 2003］。その際、患者の移動というメンバーの問題を人文地理学者N.スリフトのmobilityの概念と関連づけた［Thrift 1996］。また、移動という問題を安定的に解決するためのシステムの構

築を、ギデンズの時間・空間の距離化（time-space distanciation）の具体例として位置づけられることを示した。さらに、このシステムの下でのメンバーの実践として、119番の受付から指令、そして高度救命救急センターでの患者受け入れ要請における実践の記述を、個別の特定状況を超えたレベルと、それが実例においてどのように作動する特定状況のレベルの両方の側面で提示した。

（2）高度救命救急センターの医師によるカンファレンスの分析

高度救命救急センターで数年にわたるフィールドワークの一環で行なったのが、医師らによって行なわれる毎朝のカンファレンスの観察である。このカンファレンスが行なわれるセンター内の部屋の端で参加していた。論文では、「カンファレンス」が高度救命救急センターにおいてどのようなメンバーの問題の解決方法となっているのかを記述した［Ikeya and Okada 2007; 池谷ら2004］。具体的には、救命救急センターに所属する医師が一同に会する中で、センター全体を管理する上級医に対して各チームが担当する患者に関する経過報告を行なうのがカンファレンスである。各患者に関するケース報告に基づく情報共有によって、センターとしてのモニタリング、質の管理、ベッド管理を達成する。さらにしばしば、ケース報告をあえて研修医にさせることで、研修医の学習という問題の解決策としても見なされていることを示した。いずれも特定状況を超えたレベルでの、ケース報告という活動の組織化の記述として提示した。さらに以上の点を、ケース報告の活動の組織化を、実例の記述を通しても示した。またカンファレンスにおいて達成される情報共有を「知識の実践的マネジメント」という概念で定式化した。

さらに、患者を「ケース」として報告する際の内容として、ベテランの医師らには大前提となっているものを提示すると共に、それが実例においてどのように依拠され、報告が成立するのかを記述した。実際には、「新人」としての研修医は上級医に助けられながらようやく報告内容の構成に沿った報告を達成するという場合が多く、示した事例もそうしたものとした。

この研究では、学会発表の許可を得るために医師らに見せた以外には、特にここからの知見をあらためて医師らに提示するなどということは行なわなかった。この点は119番通報の研究とは異なる。しかし後に当時の上級医から、ケース報告の方法を他の医師と共にあらためて標準化し、救急医向けの教科書［織田2013］に提示することにしたのは、著者らの論文に刺激を受けたからであったと知らされた。その教科書は、プレゼンテーションで述べるべき要素と流れ、そして報告がうまく成立しない理由について、会話事例と共に言及している。

実は、著者らが論文に示した具体例は、研修医がうまく患者の病態を伝えられず、上級医からの質問に答えながら報告が成立している例ではあった。しかしそのカンファレンスでは、研修医によるスムーズとはいえないケース報告はさほど珍しいものではなく、この点を著者らが問題化する意図は少しもなかった。むしろつかえながらなされる報告は、分析者にとっては何をどのような順番で提示するのが適切とされているのかを理解し、また論文として示すには都合がよかったとも言える。

しかしこの論文を読んだ上級医は、ここから自分たちの実践について対処すべき課題を導きだし、プレゼンテーションの方法の標準化を行い、教科書に掲載した。著者らは、どちらかといえばエスノメソドロジー研究として素朴に、救急医らの実践の記述を提示した

つもりであったが、それを医師らはガーフィンケルが言うところの「インストラクション」として受け取ったということになる。つまり上級医らは、著者らの論文を、研修医がプレゼンテーションを行なうのにどのような点で躓き、困難を経験するのかを記述し、対処すべき課題を提示するものとして読んだと言うことになる[(4)]。研究結果を定式化したものは社会の様々なメンバーにとって開かれ、インストラクションとして読まれる可能性があることを、身をもって経験したと言える。

4. 結論

調査に基づいて研究を行なう場合、119番救急要請の受付と指令の分析のように、第三者から依頼され、課題をあらかじめ明示されたところで調査を行なう場合と、そうではない場合がある。しかし後者の場合でも、人々は何らかの期待を持って研究への協力依頼に応じてくれる。したがって研究者は意図しなくても、研究結果が何らかのインストラクションとして見なされることに開かれている点は無視できない。これを研究の一つの要件とし、活動におけるメンバーの問題を記述対象とするのがハイブリッド性をめざす「ワークの研究」である。ルーティン化された問題とその解決方法ならびにその特定状況における作動という形でメンバーの活動の記述を提示することで、メンバーの活動における関心を記述の主題と内容とする。さらに、特定状況を記述するものであると同時に、特定状況を超えた一般性を備えたものにする。以上がワークの研究においてガーフィンケルが求めた要件である。つまり、ハイブリッド性を要件として提示することで、ガーフィンケルはエスノメソドロジー研究をメンバーの問題と融合させることをめざしたといえる。

これは研究者が、大きな挑戦を突きつけられていることを意味する。特定の活動において参与者が志向する問題とその解決方法を理解し、その組織化を記述することをまずは第一優先にしなければならないことになるからである。これはどの概念を分析の中で取り上げるのかは、活動を記述するまで研究者が一方的に決めることはできないということでもある。メンバーの活動において達成されようとしていること、つまりメンバーの問題に該当する概念を記述の主題と内容にしなければならないという要件があることによる。

記述のために分析する段階では、活動の組織化を理解し、記述することに専念し、その際には、それまでに対象領域について読んで知ったあらゆる事柄や、社会科学の既存の知識体系を一旦括弧に入れることになる。その後、活動におけるメンバーの問題を理解できた時、社会学や、研究対象に関連する領域の学問も参照することで、その概念の実践的レベルでの作動例として提示する。これをエスノメソドロジーでは「概念の再特定化」と呼ぶ。その際には、研究発表を行う領域における、既存の理論的概念に該当するものを探査することになる。うまく相当する理論的概念がない場合もあるかもしれない。しかしながら、自らの学問的関心から取り上げる概念を選んでしまうと、記述対象となる活動におけるメンバーの方法とはずれてしまう可能性が出てくるのである。

このように見てくると、リンチ［1993］が提示した、表象、観察などの認識論的問題と密接に関わる概念を取り上げることで、認識論的問題を経験的研究のトピックとするという研究方針は、研究者としてあらかじめ記述のトピックを決めているという点で、ハイブリッド性の方向性とは異なるといえる。リンチの方針に沿って日本で展開される概念分析の社会学［酒井ら2016］でも、ハイブリッド性の要件を満たすことについて明示的な議論はなされていない。

ここに提示した2事例は、ガーフィンケルのハイブリッド性の議論が出版された2002年より以前から開始したものであり、ガーフィンケルが展開したハイブリッド性の議論をあらかじめ踏まえ、その実現を意図としたものではなかった。しかしながら、期せずして共同研究者と共に著者が行なった研究でこだわった点が、ハイブリッド性の要件とある程度合致していることが現段階で見えてきた。

119番救急要請の例では、救急要請を受け付けて指令を出すための二つの方法を、受付に直接関与していない幹部に提示することで、結果的に、当時は「正統」とは見なされてこなかった聴取型の方法の潜在性を幹部が認識し、最終的には将来必要になる重症度の区別の実施に備えるための方法として組織として新たに「正統」なものとして位置づけることにつながったといえる。このように「ワークの研究」は、そこでなされている活動の問題と解決方法を記述して提示することで、メンバーが実践についてあらためて検討し、結果的に社会課題に対処する方法を編み出すことにも開かれているということができる。

註

（1）リンチは、ガーフィンケルの問題提起から生まれた二つの研究プログラムとして、ワークの研究と会話分析を挙げ、それぞれの発展の概略を提示し、自身はワークの研究に従事していることを明言している。しかし最近の中村和生による論文では、リンチによる近年の会話分析に対する批判をほぼ無視した形で会話分析こそが分析的であるとし、ワークの研究については言及がない［中村2017］。

（2）Sharrock教授は以前大学院生だった著者に対して、Sacksの会話分析に触れた当初は、社会生活を全て扱えるかもしれないと期待を持ったことがあると話してくれたことがある。

（3）大学院生が、メンバーの能力を習熟するために、ガーフィンケルが大学院生に勧めたのが、研究対象となるそれぞれの専門領域の大学院などで学ばせる方法であった。そうした大学院生らが、その後社会学に戻ってくるのに苦労を重ねたところから、ハイブリッド研究を追求することを同時代に大学院生だったリンチは懐疑的に、やや感情的に論じている［Lynch 1993］。しかしながら、晩年にガーフィンケルが展開したハイブリッド研究に関する議論については、それ以上論じてはいない。本稿では、ガーフィンケルが提示した、研究の指針としてのハイブリッド性を、一旦専門領域の能力の研究者がとるべき習熟という問題から切り離して論じる。リンチは、自身が認めているように、研究対象とした科学の領域の大学院には行かずに、フィールドワークによって科学のワークの研究を遂行し、また多くのワークの研究者も同様であることを考えると、これは妥当なことといえる。

（4）ガーフィンケルとサックス［1970］は定式化（作業）を活動の一部として捉え、定式化されたものは特定の読者や聴衆に向けてデザインされたものであるとした。著者らの論文もまさにエスノメソドロジー研究者や社会学者を読者として想定することが大前提とされる中で執筆されたものである。

文献

Button, Graham and Sharrock, Wes 2009 *Studies of Work and the Workplace in HCI*. Morgan & Claypool.

Crabtree, Andrew and Rouncefield, Mark 2012 *Doing Design Ethnography*, Springer London.

Garfinkel, Harold 1952 *The Perception of the Other: A Study in Social Order*. Ph.D. Thesis, Harvard University, 1952. 602, 57, 12 p.

——— 1967 *Studies in Ethnomethodology*. Prentice-Hall.

——— and Sacks, Harvey 1970 "On Formal Structures of Practical Action," John C. McKinney & Edward A. Tiryakian eds., *Theoretical Sociology: Perspectives and Developments*. Appleton-Century-Crofts. pp. 338–366.

——— (Ed.) 1986, *Ethnomethodological Studies of Work*. Routledge.

——— 2002 *Ethnomethodology's Program: Working Out Durkheim's Aphorism*. Rowman & Littlefield.

浜日出夫　1999「シュッツ科学論とエスノメソドロジー」『文化と社会』1: 132–153.
Ikeya, Nozomi 2003 “Practical Management of Mobility: The Case of the Emergency Medical System,” *Environment and Planning A*. 35(9): 1547–1564.
池谷のぞみ・岡田光弘・藤守義光　2004「13章病院組織のフィールドワーク」『実践エスノメソドロジー入門』山崎敬一（編）有斐閣、pp. 192–203.
Ikeya, Nozomi and Okada, Mitsuhiro 2007 “Doctors’ Practical Management of Knowledge in the Daily Case Conference,” Stephen Hester and David Francis eds., *Orders of Ordinary Action: Respecifying Sociological Knowledge*, Ashgate pp. 69–89.
——— and Sharrock, Wes 2018 “Social Distribution of Knowledge in Action: The Practical Management of Classification,” Jan Strassheim and Hisashi Nasu (Eds.), *Relevance and Irrelevance: Theories, Factors and Challenges*. De Gruyter, pp. 161–186.
岸政彦・石岡丈昇・丸山里美　2016『質的社会調査の方法——他者の合理性の理解社会学』有斐閣.
———・北田暁大・筒井淳也・稲葉振一郎　2018『社会学はどこからきてどこへ行くのか』有斐閣.
Lynch, Michael 1993 *Scientific Practice and Ordinary Action: Ethnomethodology and Social Studies of Science*. Cambridge University Press.＝2012水川善文・中村和生（訳）『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』勁草書房.
中村和生　2017「分析的／ポスト分析的エスノメソドロジー、あるいは概念分析」『現代思想』45(6)：112–124.
織田順　2013「1　総論　新しい定型化アプローチ手法——病態把握からプレゼンテーション、情報共有まで」太田祥一編2013『直伝！　救急手技プラチナテクニック——手技はもちろん、合併症や施行後に考えることなど、次の一手まで見据えた王道アプローチを伝授』羊土社、pp. 20–25.
水川喜文・秋谷直矩・五十嵐素子編　2017『ワークプレース・スタディーズ——はたらくことのエスノメソドロジー』ハーベスト社.
Randall, Dave, Richard Harper and Mark Rouncefield 2007 *Fieldwork for Design: Theory and Practice*. Springer.
Rouncefield, Mark and Tolmie, Peter (eds.) 2013 *Ethnomethodology at Play*. Ashgate.
酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生・小宮友根編　2016『概念分析の社会学2：実践の社会的論理』ナカニシヤ出版.
Sharrock, Wes, and Button, Graham 1991 “The Social Actor: Social Action in Real Time,” Graham Button ed., *Ethnomethodology and The human Science*, Cambridge University Press, pp. 137–175.
——— and Anderson, Bob 1986 *The Ethnomethodologists*. Tavistock.
Sudnow, David 1978 *Ways of The Hand: The Organization of Improvised Conduct*. Harvard University Press.＝1993徳丸吉彦・村田公一・卜田隆嗣（訳）『鍵盤を駆ける手——社会学者による現象学的ジャズ・ピアノ入門』新曜社.
Thrift Nigel 1996 *Spatial Formations*. Sage. pp. 256–310.
東京消防庁　2000『第23回東京消防庁救急業務懇話会答申書』
Tolmie, Peter and Rouncefield, Mark (eds.) 2011 *Ethnomethodology at Work*. Ashgate.

（慶應義塾大学文学部教授　nozomi.ikeya@keio.jp）